

# 平成 28 年度 第 11 回講演会 記録

日 時	平成 28 年 9 月 24 日 (土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	ドキュメンタリープロデューサー/ディレクター 小西 晴子 先生
演 題	山-川-海の循環と三陸での防潮堤の建設
備 考	参加者数 140 名、非会員 12 名 聴講 1 名、計 153 名。 記録 飯田 正恒

講師の小西晴子(右写真)さんはドキュメンタリー映画の製作者。昨年、岩手県大槌町赤浜地区の海岸に計画された巨大防潮堤を巡る行政と住民間の葛藤を描いた「赤浜ロックンロール」が商業劇場で上映され、私たちも観賞した。今回、その続編「民意のゆくえ～東日本大震災から 5 年」(2016 年 3 月テレビ放映)の視聴とともに、震災復興への想いをうかがった。



## 1. 映画「民意の行方～東日本大震災から 5 年」のあらすじ

2011 年 3 月の東日本大震災の発生から 2016 年 3 月で 5 年が経過。しかし、現在、仮設住宅に住む人は、東北全体で 6.5 万人。一方、東北沿岸を巨大防潮堤で囲う 1 兆円の国家事業は着々と進んでいる。住宅建築費は 2 倍に高騰し、自宅の再建をあきらめる人が増えているという。岩手県大槌町は三陸の漁師の町であるが、赤浜地区にはまだ家が 1 軒も建っていない。漁師の阿部力(41 歳)は、母京子(66 歳)と 1K の仮設に住む。漁師として海に生きると決めた彼は、自宅の自力再建を計画するも、宅地造成が遅れ、建設を開始できるのは 2017 年秋になった。住民の自治組織「赤浜の復興を考える会」会長の川口博美(65 歳)は、この復興の遅れは住民の生活より公共事業を優先させたからだという。優先される公共事業、遅れる住民の住宅再建、生活再建の現実と、東北地方のコミュニティーの再生を阻む、地域ごとの多様な現実を無視した中央の一律的コントロールと行政の縦割りの実態と住民自治、地方自治とは何かを問うドキュメントです。

## 2. 二通りの民意の表し方

住民の川口博美さんは「人間の作ったものは必ず壊れる。防潮堤に頼らず住居を高台に造り、孫子の代まで安心して住める町づくり」と主張する。正論であり、そうであるべきと私は思うが、いまだにその方向にまともならないのは何故か。一方、気仙沼市の三浦友幸氏(平成 27 年 10 月に自然観察会でお会いした)は、大谷海岸の防潮堤計画を巡り住民同士しが対立することは絶対に避けねばならないこと。中立的立場で防潮堤の必要性を検討すべく「大谷里海づくり検討委員会」を立ち上げ大谷地区民、県知事、市長、市議員、有識者などの多様な意見を聞き、議論を重ねているという。地区のリーダーにより問題への取り組み方に大きな違いがあるが、結果がどうなるか注目される。

## 3. 作者の大槌町への思い

大槌町は北上山地からの湧水が豊富であり、町のいたるところに自噴(200 本余)が見られ、生活用水として利用されている。天然記念物「イトヨ」が生息する自然豊かで、漁業が生活の基盤の町である大槌町を突如襲った大震災は人びとの生活を根底から変えた。住民たちの思いと行政の復興施策の間には大きなギャップが生じ、5 年を経過した今も生活再建が思うように進んでいない。しかし、豊かな自然、山と海の幸は住民たちの心のよりどころであり、自分達の町は自分達で守ろうとする意志とプライドに溢れたこの町の復興を、見続けて行きたいとの作者の思いに大きな共感を覚えた。

#### 4. 田中克先生のご感想

今日の講演は重い大きな問題を改めて考える機会になりました。抽象的な言い方になりますが、復興にはしっかりと全体像を見極め、物事の本質を明かにする力が求められます。地域にはそれぞれ固有の歴史や文化があり、現実の問題への対処の仕方は多様なはずで、地域の再生に共通するのはしっかりしたリーダーがいるかどうかであり、それが行政を動かせるかどうかにも深く関係します。今回のテーマは防潮堤が具体的な問題ですが、大きな視点でみると、その本質は、日本の民主主義のあり方や成熟度が問われていることだと思います。

残念なことに、民意とは別の次元で、国と地方が責任のなすり合いをする中で巨大なコンクリートの防潮堤建設が一人歩きする形で現実が動いて行きました。復興というのは、歴史、文化、風土や人の繋がりなどが多様に異なる地域ごとにしっかりした将来構想を描き、その中で進むべき道を定めるのが本来のあり方だと思います。しかし現実とは全く逆であり、防潮堤を作らないことにはその他の予算は下りず、地域の復興は進みませんとの説明が、選択の余地を閉ざす現実が進みました。それをはね除けるのは川口さんのようなパワフルな人の存在か、気仙沼舞根地区のような経験を積んだリーダーがいて、海とともに生きる未来の展望を共有し、地域全体で早期に高台移転を決め、防潮堤に依存しない暮らしを選択したところもあります。

大槌町も気仙沼市も副町長や副市長は国土交通省からの出向者で、上から下へと力が働く行政のすごさを改めて痛感しました。

防潮堤は今後100年から150年の間に予想される大地震や津波に対して耐えられる規模や構造を想定して国が作るのですが、コンクリート構造物は50年先には劣化し、作り直しは地元の経費で賄わなければならない。そのころには日本の人口は半減している時に、地元にもそのようなお金があるのでしょうか。

これまで人口増加と産業活動の拡大のために、陸と海の境界域や山と平地の境界域など、多様な生きものの聖域として機能していたところにまで、人間の技術の力を借りてどんどん踏み込みすぎた結果、予想を超えた地震や津波、大雨などにより、大きな被害が発生することになりました。

地震や津波への備えを100年、150年を見越して考えるなら、社会のあり方も同様の長期的視点で考えるべきであり、そうすれば、防潮堤で陸と海を分断するのは全く異なった結論になるはずと思われます。このことが切実に求められる時代になっているにもかかわらず、現実とは全く逆であることに、私たちはどう関わっていけばよいのかを改めて考えさせられた講演でした。

#### 5. 大槌町への支援について

大槌町で生産する「スキコンブ」を購入し、大槌町の人びとを支援して欲しいとの要請が小西さんからあり、検討することにしました。

以上